こちらは、近日公開予定の冒頭部分のサンプルです。
なお、正式なリリース版ではタイトルと一部表現等が変更になる場合があります。

大好きな推しと繋がったら、前世から繋がっていた？

あんず亭ろみお

＊＊＊＊＊プロローグ・ルイの記憶

また同じ夢をみた。

ほの暗い場所で若い女性を抱きしめて嘆き悲しんでいる。その女性が誰なのか、まったく心当たりがない。冷たい感覚が手に残る。ぐったりとして動かない女性に許しを乞い詫びている夢だ

これまでは若い女性を乱暴に抱いて恍惚とする夢ばかりをみてきた。それも一度や二度ではない。閃光のなかで女性の喘ぐ声を聞き、強烈な快感で満たされる体験をしている。

夢で構わないからあの女性に会いたい。日を追うごとに思いがつのるというのに、近頃は悲しい夢ばかりだ。

けたたましい電子音で夢から覚め、ルイは枕元に置いた携帯電話をみた。マネージャーの朱雀から昨夜遅くにメッセージが届いている。そういえば、昨晩別れ際に「明日の予定はあとで連絡します」と言っていた。「頭痛いし眠いから、未読スルーしても怒んないで」と訴えるルイに「朝見てください」と念を押したのだった。

しつこい頭痛のせいで変な夢をみるのだろう。ここ最近ずっと夢にうなされてばかりいる。日頃の行いと女癖が悪いから？　ルイは自問しながらメッセージを開いた。

「九時に迎えに行きます。博物館で関係者に挨拶と広報用の撮影です」

ああそうか、と思う。博物館の企画展、そのアンバサダーとオーディオガイドの仕事を受けた。すでにオーディオガイドの収録は終わっており、開催を控え関係者に会う段取りになっているはずだ。先にヘアメイクを済ませて現地に着くのは午前十一時頃だろう。

リモコンを操作してカーテンを開けると、高層階の窓から溢れんばかりの眩しい光が差しこんだ。生活感を嫌いホテルの部屋のような家に住んでいる。最低限の家具と家電、靴や洋服以外はほとんど荷物がない。セキュリティを重視してこの部屋に決めた。

もうすぐ八時、シャワーを浴びて準備しなければ。

「起きるか――」ルイは大きく伸びをしてベッドから出た。

マネージャーが運転する車から博物館の重厚な外観を眺め、入り口に大きな看板が掲げてあるのがわかった。

「砂に埋もれた幻の王国展」と冠したスケールの大きい企画展だ。中央アジアの広大な砂漠から見つかったという幻の王国。長年に渡り発掘調査が行われてきたが、未だ多くの謎が残ると説明を受けた。オーディオガイド録音の際に渡された資料にいくつか画像が添えられていた。

とりわけ話題になったのは、一つの棺のなかで眠る男女だ。棺には多くの宝飾品と色鮮やかな絹織物が副葬品として納められていた。おびただしい数の宝石を埋め込んだ鞘と短剣は美術品のようだった。
「想像よりずっと大がかりだ」ルイは朱雀の横顔に声を掛けた。
「事前の特集番組の反響が大きかったようです」
「へえ、お客さん入るといいね」
「ルイさんのイベントつき前売り券は即日完売ですよ」
「そうなの？　嬉しいな」
「先日の件はわたしが手配しますので」
朱雀はまっすぐ前を向いたまま言った。彼が請け負うのはルイの芸能活動のマネージメントだけではない。ＳＮＳや匿名掲示板での誹謗中傷やストーカーまがいの行為も酷いありさまだ。特に悪質なアカウントについては情報開示請求の手続き中だ。もちろん、ルイが個人的な関係を

もつ女性たちにも注意を払っている。プロ彼女を自称する彼女たちだが、お互いを牽制し足の引っ張り合いをしていることも承知している。ルイが夢にうなされる理由を「女癖が悪いせい」だと考えるのも当然だ。

ルイのファンは圧倒的に女性が多い。今や国内だけに留まらず、海外でのイベントにも国を超えて多くのインターファンが集まる。ＳＮＳの匂わせ投稿に敏感に反応する時世だからこそ、朱雀はルイの女性関係に日頃から気を配っていた。

バックモニターを確認しながら駐車スペースに車を入れる。サイドブレーキを引き、朱雀はようやくルイに目配せをした。「ルイの目的はわかっている」「こちらで手配するから余計なことはしないでくれ」とも読める。

「さすが朱雀。俺の敏腕マネージャーは誰より信頼できて仕事が早い」

ルイは含み笑いをして朱雀を見た。

案内された展示会場で企画の責任者と博物館の担当者と挨拶を交わした。詳しい説明は別の女性が担当し、ルイが見学する様子をカメラマンが撮影する段取りのようだ。

入り口を飾る大きなパネル前で撮影を済ませたところへ、「ではご案内します」と女性が声をかけた。化粧っけのない顔にメガネをかけたスーツ姿の女性だ。白衣が似合う研究者といった印象を受ける。

「かつてここにはオアシスがあり、東西交流の拠点として長い間人々の往来がありました。副葬品をはじめとする発掘品の多くが東西との交易で入ってきたようです」

空撮した遺跡のパネルの前で、女性は資料をはさんだファイルを手に滑らかな口調で話している。天まで突き抜ける青空と見渡す限りの砂の

世界、その中に今は廃墟となったかつての王国が姿を現していた。おおまかな地図で見るとおり、中央アジアの広大な砂漠の南側にある。その声がとても耳に馴染みやすく聞きやすいのだとルイは思った。

「砂漠に行ってみたいな。夜は満天の星と月明かり、ロマンチックだけど過酷ですね」

「ええ、そうですね」

ルイの率直な感想に彼女は笑顔で応えた。

発掘された食器や水瓶、酒を入れていたであろうピッチャー、絹織物やモザイクを施した装飾の一部などが並ぶなか、靴音と彼女の声だけが静かに響く。交易で栄えていたことを今に語る発掘品には、様々な国の文化の痕跡が残っていた。

とても不思議な心地がした。当時の人々の暮らしを鮮烈な立体映像でみているように錯覚する。大まかな説明を受けて館内を巡り特別展示の

部屋に着いた。
「ここは『男女二人が眠る棺』の部屋です。男女は現在非公開のため、発掘当時の映像と副葬品を展示しています」
彼女は部屋の隅に立つ警備員に会釈をしてからルイに促す。
ルイは大きなガラスケースに入った棺に目を留めた。木彫りの装飾に鮮やかな色を重ねた重厚な棺だ。
「ホンモノ？」声をひそめてルイがつぶやく。
半信半疑なルイに彼女は瞳を輝かせ「はい。特別な許可を得て実現しました。副葬品のなかでもひときわ美しい豪華な宝飾品の数々をどうぞご覧下さい」と言った。
ルイは警備員に会釈をして、ベルトパーティションで規制された近くまでまっすぐ棺を見据えて慎重に足を踏み入れた。

「……許してくれ」
夢と同じ声が聞こえた。これは俺の声だ、俺が言っている。ルイは目を見張り、周囲を見渡したそのとき、すっと音もなく目の前に立体映像が浮かび上がった。花を持った髪の長い若い女性が手を伸ばせば届きそうな距離に現れている。ホログラムか、なんて凄い仕掛けなんだ。息をのみ驚嘆するルイに立体映像が語りかけた。
「お庭の花が咲きました」
「どこに行っていた」
「踊りを教わりました」
「あの男、踊り子か」
太陽の光を遮りごうごうと恐ろしい音をたてて砂が舞い上がる、嵐がきた。
「あなたに喜んでほしくて――」

「二度と行くな、次は許さない。部屋に入っていろ」
「ごめんなさい」
無理につくった笑顔が今にも泣き出しそうだ。いつも何かに怯えてこちらの機嫌ばかり伺っていた。
「愛しています、あなただけ」
「……許してくれ」
――頭が痛い、なんだこの苦しい嫉妬は。心臓が焼け付きそうだ。俺は誰と話してるんだ――

「葉山さん、大丈夫ですか？　マネージャーさんを呼びましょうか」
頭がぐわんぐわんするのに混じって、くぐもった声が聞こえる。さっきまでの耳なじみのよい聞き取りやすい声ではない。水中でダイバーがマイクを通して話す声のようだ。

「葉山さん？」
「――え？　ああ、ごめんなさい、圧倒されて。大丈夫です」
心配そうに見上げる彼女を安心させようと、ルイは無理に笑顔をつくって別の展示品に目を向けた。資料にも載っていた短剣を展示するガラスケースだ。びっしり宝石が埋め込まれた鞘は、時を超えても変わらぬ輝きを放ち不気味な妖気さえ感じる。ルビーやサファイヤをあしらった柄を握り、鞘から抜いて本当に斬ったのか。ルイはホンモノの迫力に言葉を失った。
「あの指輪……」
副葬品の中でもひときわ美しい指輪に目を留めた。繊細な金細工に色とりどりの宝石をあしらった品だ。
「指輪は純金製でルビー、ターコイズ、翡翠、サファイヤが埋め込んでありま す。棺の中の二人は『暗殺された身分の高い権力者とその妻』の

説が有力です。調査により、女性には特筆すべき外傷がないことがわかっています」

ルイは説明を受けて大きく頷き「なるほど」とつぶやいた。「凄い仕掛けの展示だ」と言いかけて思いとどまった。展示資料やオーディオガイドの台本にそのような記載がなかった。ひょっとすると、映像の仕掛けなどはじめから無いのではないか。では先ほど現れた若い女性は何者だ？

特別展示の部屋を出る前に振り返りもう一度棺を見たが、若い女性の立体映像は現れなかった。

インタビューと撮影を終え、私服に着替えたルイが帰り支度をする朱雀に声をかけた。

「絶対信じないだろうけど、俺さっきヘンなモノを見た」

「ヘンなモノとは」
真顔で応じる朱雀に、ルイは今感じている全てを吐き出したい衝動を抑えきれない。
「マジでそっくり――」
「はい？」わけが分からない朱雀は眉間にしわを寄せてルイを見ている。
「今はやめとく、ここ出てから話す」
「わかりました」朱雀はそれ以上を訊かず衣装のスーツを入れたガーメントバッグを持ち、ルイを促して控え室を出た。

＊＊＊＊＊ 彩花の推し活

そろそろ帰ろうかな。

大学の図書館は離れた席に数人がいるだけで静まりかえっていた。彩花は読んでいた本を閉じて、カバンから出した携帯電話の電源を入れる。

壁紙に設定した推しの笑顔に心が浮き足立つ。今日も推しが美しいしカッコイイ、それだけで元気になる。

彩花が夢中になっているのは俳優で歌手の葉山瑠威だ。近頃はあえて俳優や歌手と区別せずにアーティストと呼ぶらしい。語学に堪能なルイはアジアでも人気だ。日本で開催するイベントにも海外から参加するファンが増えている。

先月初めてファンミーティングに参加したときは、推し活に不慣れな自分が皆が周知の暗黙のルールを破っていないか、浮いて悪目立ちしていないかとても不安だった。相手や周囲の表情から感情を先読みして萎縮してしまう。目立たず控えめでいることを自分に課してきた。他人か

らみたら窮屈かもしれないが、いじめターゲットになりやすい自分を守る手段だった。

それでも彩花にとってルイは手の届かない憧れの存在だ。同じ空間にいるだけで幸せ、ルイと目が合った気がして嬉しくてたまらなかった。たぶんあの会場にいたファン全員がそう思ったに違いない。

入り口に博物館や美術館で開催される企画展のフライヤーがずらりと並ぶ。その中から葉山瑠威の名前が入った一枚を手にとった。カバンからクリアファイルを出して、裏側のルイの写真が表になるように挟み込む。図書館にも推しがいた。今日はとてもラッキーだ。

「砂に埋もれた幻の王国展」ルイがオーディオガイドを担当する企画展だ。イヤホンでルイの声を聞いたら、話の内容はおろか展示内容も頭に入らないだろう。

最近は嬉しいことが続いている。ルイのイベント付き前売り券が取れ

たし、写真集を購入し応募したなかから抽選で五十名が参加できるクローズドイベントにも当選した。ルイの人気は凄まじく、当落発表の日には「ルイ関連は倍率がエグい」「またダメだった」と嘆く投稿が相次いだ。

写真集イベントの日、彩花は何日も悩んでやっと決めたワンピースを着て家を出た。トークの後にサイン入りポスターの手渡しと握手会があるのだ。

ネイルサロンで花のデザインに仕上げてもらう間、なじみのネイリストとルイの話題で盛り上がりとても楽しかった。

彩花の推し活はいつも一人参加だ。ファン同士の会話は気分も高まり大いに沸くだろう。でも正直どこで知りあえばいいのかよく分からない

し、しがらみもなく相づちを打ち、聞いてくれるネイリストと話すほうがずっと気楽だ。

午後一時の受付開始に合わせて会場に入ると、華やかにおしゃれをしたファンが集まっていた。彩花はバッグからルイのアクリルスタンドを出して、イベントポスターと一緒に写真を撮った。念願の「ルイのアクスタとお出かけ写真」だ。

緊張がほぐれ人だかりに目を向けると、ルイのパネルと一緒に撮る行列ができていた。スタッフがファンの携帯電話で撮影している。一人参加でも大丈夫そうだ。勇気をだして彩花も列に並んだ。

午後二時の開始時間が近づくにつれ、彩花の緊張はピークに達していた。今日はなんと最前列だ。受付で提示した二次元バーコードから表示された座席番号と、椅子の番号を何度も確認したから間違いない。全て

の運を使い果たした今、どんな怖いことが起きるのか不安でたまらない。
「お待たせしました。それではお呼びしましょう。葉山瑠威さんです。拍手でお迎えください」
司会者の紹介に続いてルイが登壇し、一斉に息をのみ声にならない歓声とどよめきが沸き起こった。ハイブランドのスーツを着たルイはどこから見ても完璧で、美しすぎて正視できない。ルイは一人一人と視線を合わせるように会場全体を見渡している。
「皆さんこんにちは、葉山瑠威です。今日はみんなが楽しめるイベントにしたいと思っています。よろしくお願いします」
――ああ、ルイだ、ホンモノだ！　ゆったりとした動作で椅子に座るのを、彩花は息を詰めて見つめた。

この続きは、DLsite がるまに様にて近日公開予定です。
よろしくお願いいたします！